

テーマ:水素水選びのポイント

水素水選びのPOINT③ いくら「水素濃度」が高くても…

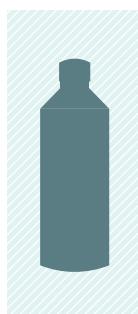
水素は高圧をかけねば、いくらでも水中に溶存することができますが、いざ飲む段階での常気圧の状態では、溶存水素濃度の限界値は1.57ppmということが科学的に証明されています。そのため、よくスティック・タイプで水素水を生成する商品が「2.0ppm」とか「2.6ppm」など、高濃度の水素溶存濃度をウリにしていますが、水が入った容器にスティックを入れ、蓋を閉めて振れば(圧力をかけねば)、確かに高濃度の水素が発生します。しかし、いざ飲もうと蓋を開けると、1.57ppm以上の水素は一瞬にして抜けてしまうのです。

※また、ペットボトルに入れたままの状態では栓をしていても、していないても、1.57ppm以下の水素も順次なくなっています。



水素水選びのPOINT④ 水素水の容器

水素水は現在、市販されているものでも、30種類以上出回っています。さらに水素水精製機なども多数出回っています。しかし、法に規制が無く、少しでも水素が入っていれば、「水素水」として販売されています。さらに容器や精製方法によって水素はどんどん抜けてしまうのです。



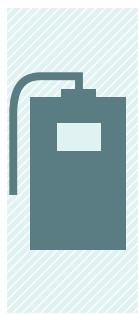
ペットボトル容器タイプ

手軽に店頭で購入できますが、水素は容器から抜け出てしまいます。すでに店頭に並ぶ頃、ただのミネラルウォーターである可能性があります。



スティックタイプ

マグネシウム入りのスティックをボトルの水に浸すだけで簡単に水素水を作ります。しかし、ボトルから水素は抜けていき、スティックと反応しないと水素は発生しないので、反応に時間もかかります。また、マグネシウムが酸化していくのでメンテナンスが必要です。



電気分解精製機

浄水器のように設置して電気分解により水素水を作ります。ペットボトルと同様に作り置きすると水素は抜けてしまいます。また、スティックタイプと同様、電極付近にしか水素が発生せず、メンテナンスが必要です。



タブレットタイプ

手軽に口にできますが、水素は水に溶けないと化学反応は起きにくくなります。つまり、水素を活性酸素に接触させることができません。(前回rapispa通信第2回参照)また、極度にアルカリ性の強いものが回っているため、胃など各器官に様々な負担をかけます。



アルミパウチタイプ

水素の抜けにくい容器です。水素は地球で最も小さい元素なので、どんな容器でも少しづつ抜け出してしまうため、「アルミボトル」や「アルミパウチ容器」からも抜け出てしまうのですが、時間経過と残留水素の量から判断して、これらの容器であれば表示してある賞味期限内であれば有用です。



岩層封純水-水素水-では5層構造の特殊パウチを使用し、溶存水素を守っています。